

158. 大津市東光寺遺跡

発掘調査略報(1)

1. はじめに

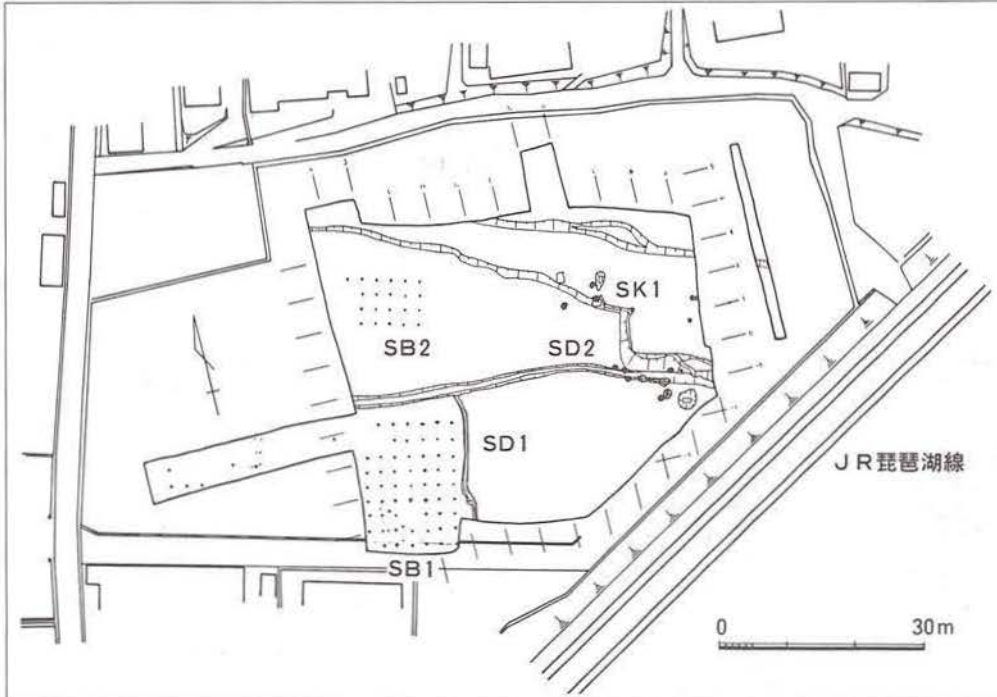
東光寺遺跡は大津市南大萱町に所在する。琵琶湖を臨む瀬田丘陵の縁辺に位置する集落内より、古瓦の出土が知られ、従来より寺院跡として認識されてきた。一方で、大萱の集落は近江国府の北方に位置し、国府と同じ正方位の地割であることや、大萱が大衙屋に通ずることなどから前期近江国衙説や栗太郡衙説なども提唱されている遺跡でもある。そのため、大津市教育委員会を通じて、同二丁目34-1～22の5,750㎡を対象にマンション建設計画があることを知った県教育委員会は、昭和58年1月17日から同年3月31日まで試掘調査を行なった。その結果、7世紀後半から8世紀前半にかけての遺物と、11世紀後半の遺物・遺構の存在が判明したため、同年4月1日より8月31日まで本調

査を行なった。以下、注目すべき遺物・遺構のうち、今回は上層の11世紀後半代の遺物・遺構について、その概略を報告したい。なお、調査は、財団法人滋賀県文化財保護協会が行なった。

2. 調査の概略

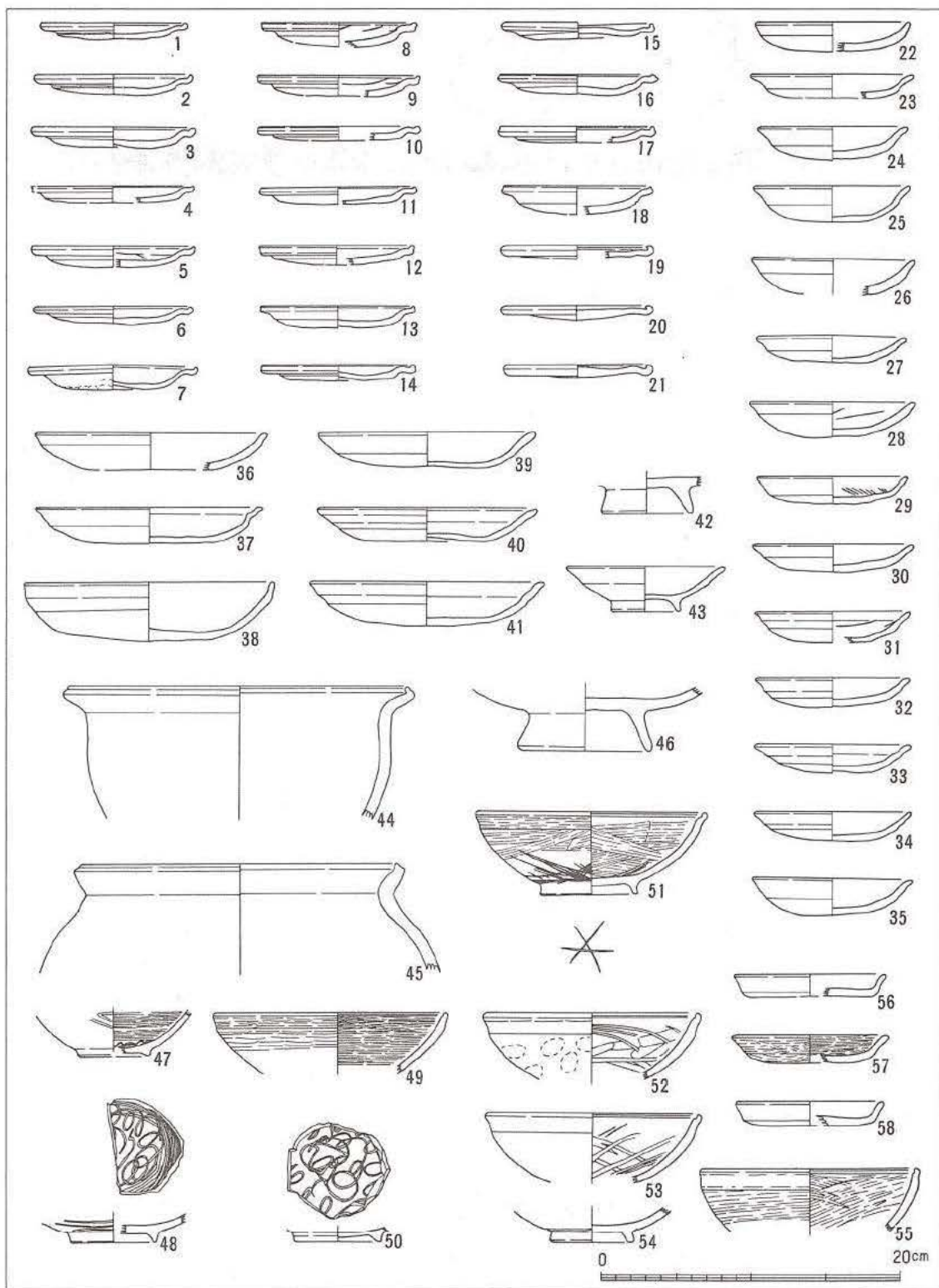
遺構面は2時期に分けられ、上層では11世紀後半代の掘立柱建物2棟、溝2条、土塙、ピットなどを検出した。下層からは7世紀後半から8世紀前半にかけての掘立柱建物群、井戸1基、溝、自然小河川跡などを検出した。遺物は2時期を合わせて多量であり、総量はコンテナ150箱に及ぶ。種類別にみると、土器類約70箱、瓦類約70箱、金属器類1箱、石製品類1箱、木製品類8箱の他、動物遺体、植物遺体等がある。なかでも、呪符木簡、海獣葡萄鏡、墨書土器の出土は特筆される。

(遺構)調査区の大半は東レ株式会社の旧社宅であり、1m前後の搬入土で覆われていた。以前は湿田であった。しかし、調査区北東部は一段高い丘陵裾であり、水田や住宅建設のため著しく削平を受けている。上層



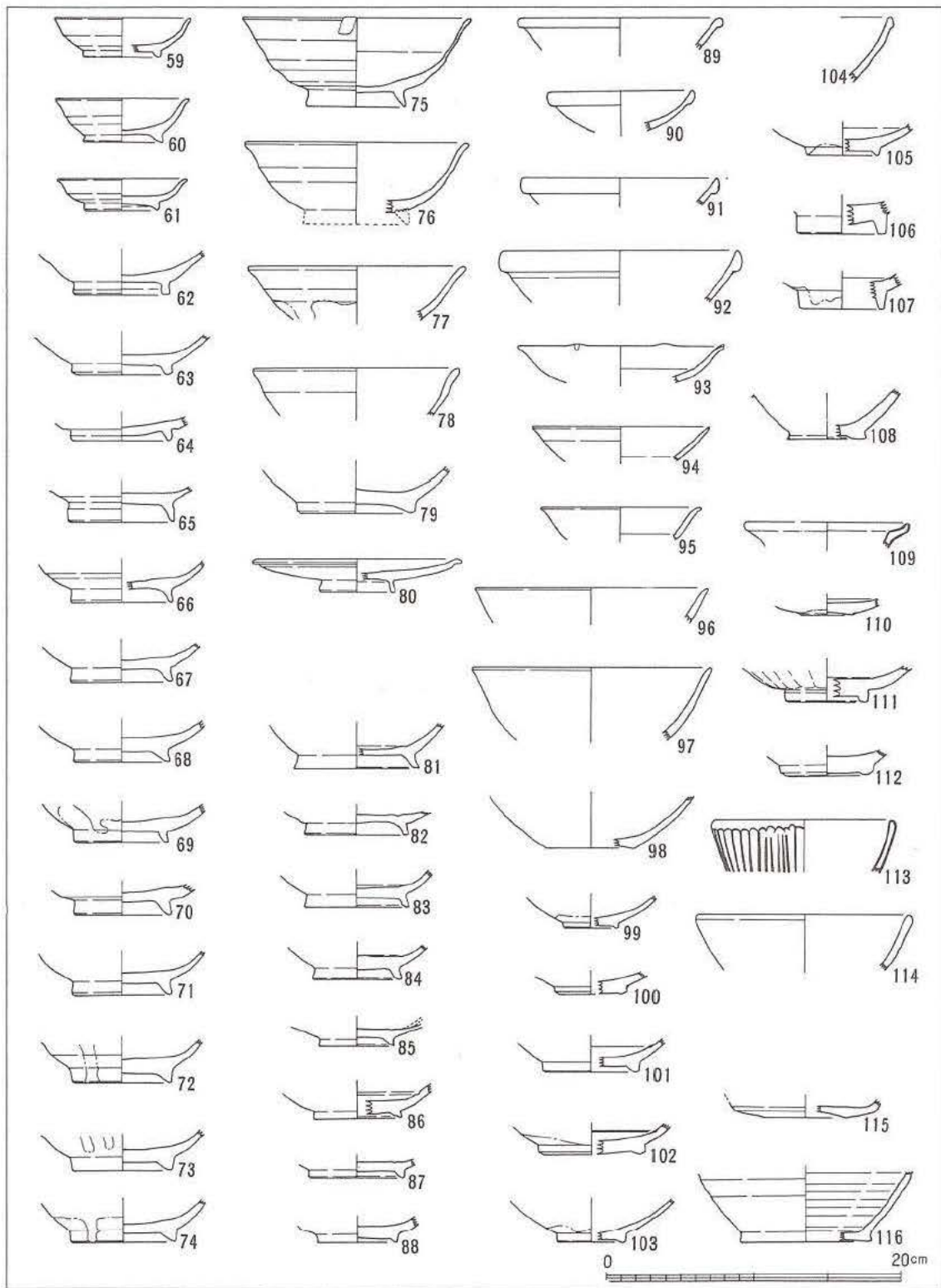
第1図 上層遺構平面図

遺構は、旧水田面より-80cmで検出した。SB1は、6間×8間以上の南北棟総柱の建物で、同時期の掘立柱建物としては県内最大規模である。1間の柱間は平均215cm(約7尺)を計る。柱穴掘方は35cm、柱痕部は17cmが多い。柱痕部には遺物



第2図 上層遺構群出土土器(I)

(SD 1 : 98, 100 SD 2 : 2, 5, 7, 8, 9, 18, 19, 21, 22, 27, 29, 30, 31, 32, 34, 35, 36, 37, 39, 40, 43, 44, 45, 69, 76)



第3図 上層遺構群出土土器(2)

(SB I : 6, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 20, 24, 25, 26, 28, 41, 42, 52, 53, 54, 55, 57 SK I : 38 SK 5 : 56)

が残る例が多く、特に北東隅(丑寅=鬼門)の柱痕部からは2点の呪符木筒が出土した。SB 2は3間×4間(あるいは5間か?)の東西棟総柱の建物で、1間は210m(7尺)を計る。柱痕部に残る遺物は少ないが、SB 1とはほぼ同時期に廃絶したと考えている。また、柱痕部に炭化木材を残す点から火災による廃絶とみられる。これら2棟の建物は、丘陵裾から東西方向に流れる排水用の溝(SD 2)をはさんで南北に位置し、その間約13mを計る。2棟の建物の主軸方位はSB 1が東に約12°、SB 2が東に約15°振っている。SD 1は、SB 1の東面に設けられた雨落ち溝と思われる。溝幅は60cm、深さ5cm程の小溝で、溝内には小片の土器や木片、炭化材が遺存していた。また、呪符木筒の出土した柱穴に近い、SD 1北端部から、植物繊維にくるまれた桃の果核を20数個検出した。SD 2は幅1m前後、深さ50cm程の東西溝で、SB 1とSB 2を画する。溝内より、土師器皿、黒色土器、灰釉陶器、木製品、鉄器(刀子)を出土した。SK 1は丘陵裾でかろうじて削平をまぬがれた土壌である。形状は隅丸方形で、長辺1m、短辺60cm、深さ13cmを計る。土壌内より、砥石、土師皿、黒色土器碗が出土した。

(遺物)上層遺構から出土した遺物は、土器では土師器、黒色土器、灰釉陶器、瓦器、緑釉陶器、白磁、青磁、木器では、呪符や木筒状板材をはじめ、下駄、ハシ、シャモジ、礎板、曲物などが出土した。金属器類では、釘や刀子などの他、神功開宝、隆平永宝、富寿神宝や北宋銭など銭14点が出土した。これらのうち、今回は、11世紀後半の基準資料となりうる土器類を中心に報告したい。

上層遺構の中で、もっとも多く出土したのはSD 2とSB 1である。このうち、当時の器種構成に最も近いと考えられるSD 2の出土土器をみると、破片総数1169点のうち、土師器皿 828点(約71%)、土師器鍋70点(約6%)、須恵器 150点(約13%、ただし下層の遺物が混入している)、黒色土器75点(約6%)、灰釉陶器3点(約0.5%)、その他となっている。出土土器の7割を占める土師器皿のうち、口縁部が屈曲する「ての字」口縁の皿(A類)と、口縁部が外反する皿(B類)の比率は約3:2となる。以下主要な器種についてみてみると、

皿A (1~18)：口縁部が「ての字」に屈曲し、端部は巻き込み気味に上方へつまみあげる。外端部を丸くするもの(1~7)と沈線を廻すもの(8~18)がある。口径は10.6cm前後が多い。このうち、5・8・9は、内面に放射状のヘラ圧痕が認められる。1・2は底部から口縁部への屈曲部外面に、幅1mm前後のヘラによる押圧が8~10回で1周する。

皿B (22~41)：小皿(22~35)と大皿(36~41)に

分かれる。小皿は口縁部一段ナデのもの(22~30)と二段ナデによるもの(31~35)がある。28・29・31には内面にヘラもしくはハケ状工具の圧痕が残る。22のみ、内外面ともヘラミガキを施している。口径は5.2cm前後が多い。大皿も口縁一段ナデのもの(36・39)と二段ナデによるもの(37・38・40・41)がある。38は深底で、やや古相を示す。口径は15.2cm前後が多い。

皿C (19~21)：扁平な皿で、口縁端部を内側に巻き込む。口径は10cm前後が多い。

土師器鍋 (44・45)：44は体部が半球形で、口縁は外反し、端部は内傾してつまみ出す。45は壺形で、口縁は上方にのびて、端部は面をなす。内端部はややつまみだす。実測可能なものはこの2点のみであった。

瓦器 (47~50)：遺構からの出土はなく、包含層からの小片のみである。各破片での観察を総合すると、見込みに螺旋状ミガキ、体部内面は圏線状ミガキ、口縁部外面はヨコ方向のミガキを施す。上層遺構群廃絶直後の時期を示すと考えられる。

黒色土器碗 (51~55)：51は両黒で、内外面ともにハケ状工具で仕上げる。口縁部内面には一条の波線を廻らし、体部外面の高台接合部から斜め上方にヘラミガキを施す。底部外面には3本の直線からなるヘラ記号が、内面には数量を示す「十」が描かれていた。他の黒色土器よりは古相を示す。

黒色土器皿 (56~58)：内外面ともにヘラミガキを施した後、黒化する。口径は10cm前後が多い。

灰釉陶器 (59~80)：小碗(59~61)、碗(62~79)、皿(80)がある。量的には碗が圧倒的である。東濃系のものが多い。

緑釉陶器 (81~88)：上層遺構群に若干先行する土器群である。見込みに沈線を廻らし、高台底面にゆるい段をもつ近江系のものかほとんどである。

白磁 (89~107)：口縁の形態から、玉縁状のもの(89~92・104)と、尖り気味に終るもの(93~97)がある。

青磁(109~114)：上層遺構群に後出する土器群である。

須恵器(115~116)：上層遺構群に若干先行する土器である。底部は糸切り痕を残す。

3. おわりに

現地調査を終了して早や5年を経過しており、貴重な資料を公表する機会を失っていた。今回の報告は膨大な資料のごく一部であるが活用して頂きたい。

(岡本 武憲)